

サモア諸島における初期の文化接触変容

溝 口 靖 夫

文化人類学上、南太平洋で世界的に注目をひいたのは、トロブリアンド島とサモア島である。前者は故マリノウスキ教授の調査で有名であり、後者はマーガレット・ミード女史の研究で知られている。また、タヒチ島が画家ゴーガンで有名であるように、サモアは『新アラビアン・ナイト』や『宝島』のロバート・ステイヴンソンが住んだところとして記憶すべき島である。

ミードがその報告で問題としたのは、現代サモアの文化の特徴であり、殊に『サモアにおける青春期』(“Coming of Age in Samoa”)では青春期の女性達の性生活の調査を中心とするものであり、ここは南太平洋の諸島のうちでも、行き届いた調和ある文化接触変容 (a thorough and harmonious acculturation) の行われた場所の一つであることがのべられている。⁽¹⁾ それでは、そこに至るまでの新旧両文化の間には、何らの対立はなかったのであるか。両者の関係が比較的良好であったのはいかなる理由によるのであるか。その文化接触変容の根本的な動力は何であったか等の歴史的考察がわれわれの関心となるのである。

そこで本論稿では、これらの問題と関連して、主として初期のロンドン外国伝道協会派遣宣教師の当時の記録により、接触の初期の事実の概要を考察したいと思う。

この諸島がはじめて白人により発見されたのは、恐らく一七二二年オランダ人航海家ヤコブ・ロッヘウェーン(Jacob

Roggeveen) によつてであり、彼はこの諸島中、最東端のマヌア島を見出し、これを船長の一人の名をとりバウマン (Baumann) 島と名付けた。その後、一七六八年五月三日、フランス人の航海家ブガンヴィルがこれを探検し、ナヴィガトール島 (Iles des Navigateurs) と命名した。その理由は島民がカヌーをつくるのに巧みであり、航海に秀でているという印象を与えたことによる。この名称は後年まで用いられ、広くナヴィゲイター諸島として知られたのである。

一七八七年ふたたびフランス人ラペルーズ (La Pérouse) が訪れたが、その仲間であつたラングル (Langle) とその部下はツツイラ島で住民に惨殺された。ことの起りは、それより前、住民の一人がラペルーズの船で物を盗んだといふので、銃で撃たれたことに始まる。彼は海岸に連れられ、出血で瀕死になっていたとき、仲間の住民たちは彼のため復讐を誓つたのであり、これがラペルーズの仲間が海岸で襲われた理由であつた。海岸からは石が弾丸のように投げられ (石投器で)、このため、ラペルーズとその兄弟と乗組員が十名殺された。これ以来五〇年間、この島は白人から恐れられ、一七九一年、パンドラ号のエドワードと、一八二四年コッツェブ (Otto von Kotzebue) によつて探検された以外近寄るものは殆んどなかった。しかし、サモアの原住民は太平洋諸島で特に野蛮且つねい猛であつたといふのではない。彼等はポリネシア族に属し、おそらく最も純粹のポリネシア系人種であり、多分東南アジアのマライに由来するマライ・ポリネシア系であらうといわれている。丈は高く、平均五フィート一インチ位であり、筋肉は逞しく、皮膚は淡褐色で、毛は黒いが、ニグロのようにちぢれておらず、多少波状を呈している。太平洋諸民族のうちでも、体軀容姿とも優美なものに属するものと見られている⁽²⁾。文化の程度も、むしろ、ハワイ島などとともに、比較的高いものであつたと思われている。

サモアの住民とヨーロッパ人との接触は、このように最初から円滑であつたのではなく、他の島々におけるように、初代航海家たちとの対立をもつて始められたのであるが、これを友好的なものに導いたのは、キリスト教の宣教

師たちである。彼等は、住民にキリスト教の信仰を伝えるとともに、サモアの固有文化とヨーロッパ文化とを結ぶための最も根本的な動力となったものであり、又、原住民の心にヒューマニティを喚起したことは、サモアの文化接触上最も重要なことである。

サモア諸島の伝道は一八三〇年ジョン・ウィリアムス⁽³⁾により始められた。彼はポリネシアの使徒と呼ばれており、南太平洋伝道の開拓者としての榮与を担っている。ロンドン外国伝道協会に属し、一八一六年南太平洋伝道に派遣されたものである。それ以来ポリネシアの各諸島で伝道していたが、一八三〇年五月三日ソサイエティ諸島中のライアテアから出帆して、サモアに向ったのである。

これよりさきウィリアムスはライアテアにすでに十一年間住んでいた。一八二四年ナヴィゲイター島に伝道を志したのであったが、ライアテアから二〇〇哩の遠くにあったことと、島民が獐猛であると伝えられていたので、これの実現は容易でなかった。ことに、ウィリアムス夫人はこの点を案じたのであったが、ついに夫人も賛同することになりいよいよ実現に向ったが、これにふさわしい船がなかった。ウィリアムスはそこで自ら一艘の船を建造しようとした。そのためには鉄工の仕事のためいろいろ設備が必要であるが、殆んど鉄の道具も鋸もまいはだも索具も帆の布もなくて、八人乃至十人の住民の助けをかりて縦六〇呎、横一八呎の七〇噸か八〇噸の船をつくることになった。これ全く彼の少年時代に金物商店の暇々に鉄工所で仕事をした経験の賜物である。船は「平和の使者」(The Messenger of Peace)と名付けられた。ウィリアムスはイギリスからの物資の補給を待っていたがそれを待ちあぐんで、一八三〇年五月二十四日出帆した。船はウィリアムスとバルフ(Balf)及び七名の土着の伝道師をのせてライアテアからサモアに向った。途中クック諸島のマンガイア島、ラロトンガ島及びアイツタキ島を訪れ、更にセヴエイジ島を経てトンガ諸島のトンガタブへ立寄った。ここでウィリアムスはファウエア(Fauea)というサモアから来たクリスチャンに会ったが、これは彼の伝道に重要な契機を与えたのである。ファウエアは元サモアの酋長であるが、十

一年間も故郷を離れているので帰郷を望んでいること及びウィリアムスの初めの考えではサモアとニューヘブリディーズ島へ向うことであつたが、ファウエアは、ニューヘブリディーズ殊にエロマンガは住民が獐猛であるので要心が大切であることを伝えた。果せるかな、ウィリアムスの終焉の地はこのエロマンガとなつたのであるが、ウィリアムスもこのことを知る由もなかつた。

ウィリアムスはファウエアに案内されてトンガ諸島のハパイ・グループにあるレフガ島に立寄り、ここを一八三〇年八月出帆し、サモアに向つた。レフガを出てからしばらく順風で快走したが、そのうちに逆風となり、四十八時間恐るべき嵐に見舞われ、そのみならず、インフルエンザが発生し、船中のものはほとんどみな罹病した。レフガを出て七日後の八月二十日に、サモア諸島中のサヴァイイ島の雲にそびえたつ美しい山峰を認めることができた。風はなおもすごかつたので、船を岸に着けることができなかったが、彼等が海岸に近付くと多数のカヌーが周囲にやつて来た。ファウエアはサモアの近況について彼等からいろいろ知識を得たが、中でも彼を驚かしたのは、最近この諸島の王であつたタマファインガ (Tamafinga) が死んだということであつた。ファウエアがトンガを出発する前にウィリアムスに告げた最大の不安は、タマファインガが恐るべき異教の専制者であることであつた。しかるに彼等が到着する十日か十二日以前にタマファインガは人民に殺されたのである。しかもそのことが到着直前に行われたことは一層の重要さをもつものであつた。ウィリアムスの考えるところによれば、これがもし一二ヶ月以前であつたとすれば、酋長達はその後継者を決めていたであらう。そうすれば、その後継者もその地位からして必ずや宣教師の計画に反対を表明する立場に立つたであらう。ところがタマファインガの殺されたのが数日前であつたので、まだその前後策を講ずる暇もなかつたため、好都合であつたと考えられたのである。タマファインガというのは、或る種の魔術的な力、ことにいくさのための靈力を有するものと信じられていた。彼はサモアの貴族出ではなかつたが、この特異な靈力をもつという理由で恐れられていたのである。或るとき貿易船が逃亡奴隷の代りに、島の娘を誘拐したことがあ

るが、彼は島民にその翌日には逆風が吹いてそのカヌーを吹き戻すに相違ないと予言したのであったが、事実その通りになったので人々の信頼を得るに至ったのである。しかるに彼は他面島民に種々暴虐を働いたので島民の怨みを買ひ、ついに住民の叛逆を招いて殺されたのである。彼はいつも数名の護衛をつけて旅行していたが、たまたまウポル島を旅行中、叛徒の謀略で護衛が遠去けられ、そのすきを襲われたのである。彼はそれに気付いて脱出を試みたが、海岸まで逃れたところを追いつめられて棍棒で殺された。タマファインガの死後、まだ後継者は定まっていなかったが、サヴァイイ島の一番有力な酋長のマリエトア (Malietoa) は、サモアの風習に従って、サヴァイイ島からタマファインガの殺されたウポル島へ復讐の戦いに出かけたのであり、ウイリアムス一行がサヴァイイ島の首都サパパリイに投錨したときは、マリエトアの弟であるタマレランギが留守役をつとめていた。

この様な島全体の変動期に宣教師の一行が到来したことは、文化接触上概して好条件であつたと考えられる。ことにウイリアムスの案内役として土地の酋長であつたファウエアがいたということは、何よりの力となったものである。わが国のキリシタン布教の開始においてはヤジロウがサヴィエルの案内者となり、又近代中国の布教には中国青年リアン・ア・ファがモーリソンの弟子として又最初の中国人プロテスタント伝道者として活動した。ハワイの布教においても一八二〇年数名のハワイ青年が宣教師一行とともに帰朝し、殊にその中の一名はカウアイ島の王子であつたこと、又、ニュージーランドの場合にも一八一四年デュアテラというニュージーランドの酋長の子が案内役をつとめていること等、これらはいずれも布教の開始に大なる便宜を与えたものであつた。かくしてウイリアムスに随行したファウエアは、その妻とともに、船が海岸につくやいなや熱心に宣教師とキリスト教のことを酋長達に推奨したのである。ファウエアは彼等の旧友であつたので話しは極めて円滑に進み、タマレランギはウイリアムス一行を歓迎したのである。

このとき船の周囲に集つた島民達は宣教師達を大変物珍らしく観察するのであつた。ウイリアムスの衣服をしげし

げと眺めたのであるが、彼の足の指がないと思つて驚いてこれをファウエアに告げるものもあった。ファウエアからウィリアムスは足に着物をつけているのだと説明されて納得したという有様であつた。このとき、王の弟タマレランギは椰子や豚やバナナ等を船で売ろうと持ち來たつたのであるが、ファウエアから、このメッセンジャー・オブ・ピースという船は「祈りの船」であるから商売はしないのだと聞いて、持つて來たすべてのものを宣教師に贈物としたのである。これに感謝して、ウィリアムスは一行を上陸させようと決意し、その翌日の八月廿一日、宣教師八名と婦人五名子供十名は寝台の枠や家具その他の荷物を船から揚げたのである。その日の午後タマレランギからの急報によりマリエトアがウポルから歸來し、宣教師ら一行の來島の事情を聴いて心からの歓迎を表明した。マリエトアは年凡そ六十五才ほどの頑強なしかも威嚴に充ちた老酋長であつた。ファウエアは彼に最高の儀礼をもつて挨拶した。宣教師達は、彼にタヒチ産の布を贈つたところ彼はそれを身につけて大いに満足の意を示した。宣教師達はこの機会に彼が一日も早く戦争を終えるようにすすめたのに対して、マリエトアもこれに同意したが、これは直ちに實現されるものではなかつた。

その翌日の夕刻、マリエトアは宣教師ウィリアムスとバルフとの歓迎の宴を開いたのであつたが、二人が船から上陸すると人々は炬を点じて彼等を出迎えるのであつた。二人が途中で昨日からの労働で疲労したことを述べると群衆はたちまち彼等の手足を捕えて肩車に乗せ彼等をマリエトアの許に運んだのである。彼等は文字通り手足を一杯に伸ばして人々の腕や手の上に腹這いになつたままマリエトアの住居まで約一哩半の道程を一挙に運ばれたのである。その道すがら人々は、聖書4の中のザアカイの如く、椰子や他の樹木の上によじ登つてこの光景を目撃したのである。二人がマリエトアの屋形に到着すると、そこにはマリエトアとその妃が立派なマットの上に座しており、宣教師らを最高のエチケットをもつて歓迎したのである。そこで二人は再びこの島へ到着の目的について語り、ついで歓迎の舞踏会を觀覽した。多くの群衆が集つてこの新來の偉大なるイギリス人酋長のために鼓を打ち歌をうたつて男女互いに

入り乱れて踊り続けたのである。これが宣教師達の上陸最初のサモア人とのコンタクトであった。

これ以来宣教師達はマリエトアにより特別の保護を与えられることになり、宣教師の中四名がマリエトアとともに居住し、他のものは彼の兄弟の側に留まるよう要求された。これに対しウィリアムスは長く同島に留まり得ないが十ヶ月又は十二ヶ月後には再び来るべきこと、もしそのときマリエトアが宣教師に与えた約束を忠実に守っているならばイギリス人の宣教師達が増員され一層その事業を推進すべきものであることを述べたのである。かくしてウィリアムスはバスケットを開いて、種々の贈物を取り出し、それらをマリエトアとその兄弟に示したのである。マリエトアはその中から斧を取って非常に喜んだ。弟のツマレランギはナイフをとってこれを息子に与え、また鏡と鍬とを二つとり、これを彼の二人の妻に一つずつ与えたのである。そして他の凡てのものは兄のものであると謙譲の美徳を示したのであるが、兄はかえって王者としての寛大無私なる態度を示して、すべてを弟に与えるよう申し出るのであった。

かくてウィリアムスなどに対する酋長達の感謝は深まり、人民に対して食料を持参するよう命じたのである。すると一時間後に豚十五頭とパンの木の実やヤムや他の多くの野菜類が集められた。それだけでなく、宣教師らに二つの相当大きな家が与えられ、またマリエトアと弟の二人はそれぞれ教会堂を建築することになった。しかるにここで一言しなければならぬのは、サモアの結婚の風習についてであるが、マリエトアはウィリアムスから受けた斧と交換にたちまち若い花嫁を獲たのである。サモアでは所謂買婚制が珍らしくなかったからである。

ウィリアムスは間もなくサモアを去って、トンガ諸島のラロトンガ島へ帰えり、それからタヒチ島、ライアテアを廻り、一八三二年十月ラロトンガからサモア島に第二回の訪問を試みた。このとき彼はサモア島のマヌア島から始めてツツイラ島、レオネ、ウボル、マノノ島、サヴァイイ島等を一巡したが、諸島中に多くの信徒を見出した。特にサヴァイイ島では彼が去ってから二十ヶ月の間にマリエトアをはじめその兄弟も、又主な酋長達も、更に住民の殆んど

凡てがキリスト教を信奉するに至ったことが判明した。そこでウィリアムスはチャペルで約七〇〇名のものに説教をしたのである。彼がサヴァイイ島に滞在中、同島に伝道中の教師達からいろいろの報知を得たのであるが、それによると、マリエトアはこの島の新しいチャペルが開かれる直前、家族を集めてエホバの礼拝者になりたいと発表したのである。そのとき子供らは、もしキリスト教が父にとってよいものであれば自分らにもよいものでなければならぬが、恐れるところは島の神々の怒りであるというのであった。そこでマリエトアは、これに答えて、もし神々が怒ることがあっても、エホバの神はそれに打勝つであろうと確信を述べたのである。かくて子供らは一月か六週間程父の経過を見守ることになった。三週間が終る頃になっても何等の変化も起らないので、子供らも遂に意を決してクリスチャンになったのである。これに続いて古い神々が破棄された。この諸島では種々の神々が信じられており、ことに有力な酋長はエツ (etu) と呼ばれるものを信じていた。エツとは鳥とか魚とか爬行動物などであって、各自の守護神の権化またはそれが宿っているとされているものであった。それゆえにそれを食べることはもちろんタブーであった。マリエトアの子供らのエツはアナエという一種の魚であったが、彼等はクリスチャンになると間もなく宴会を開き、多くの人々の前でエツを食べたのである。しかしそれにもかかわらず彼等はこのときタブー干犯が死を招かないようにと椰子油や塩水を飲んでまじないにしたという有様であった。居並ぶ人々は彼等が直ぐ死ぬであろうと思っていたが無事であったので、エホバは真の神であると語るのであった。このタブー廃止とともに、戦の神の廃棄が宣言された。この神は朽ちかけた蓆でつくられていたが、初めそれを焼き棄てるはずであったのを、それでは余りに残酷であるというので水に沈めたのである。これ以後宣教師達の教えを受けるものが多くなった。この様なタブー廃棄の光景はハワイにおけるアメリカ宣教師の渡来直前にも行われたことであり、新旧文化交替の重要な契機をなすものであった。

サモア伝道の開始はこのように極めて順調に進められたのであるが、そこには何らの困難がなかったのではない。

たとえば、土地の風習との対立の問題である。ウィリアムスとバーフらの伝道所から教哩のところで起ったことであるが、土地の人々は土地の木鐘をキリスト教会でベルの代りにたたくのに反対した。新来のキリスト教の集会にそれをを用いるのは土地の神々の怒りを招くものと信じられたからである。しかるに、教会ではこれを意に介せず、相変らず集会に人々を集めるため用いたのである。信仰問題で譲歩するのはよくないと考えたからである。かくして住民との間に対立が生じ、住民はある夜ひそかに木鐘を宣教師の伝道所から盗んで附近の簗に捨てたのであったが、教会側ではこれを探して元の場所にとり戻して用いた。かくすること数次にして、異教徒の住民は断乎として教会に戦鬪を挑み、攻め寄せたのであった。手に手に棍棒や毒槍を持ってやって来た。クリスチャン側でも鉄砲を用意して相對峙して祈っていたのであったが、幸いにして双方とも戦鬪を差控えたのである。このとき宣教師は両者の間に進み出て、神の力が槍と銃とを無用にされたのだと教えるのであった。これより多くのものがキリスト教を信じた。

ウィリアムスはかくしてサモア諸島の全地域を廻航し、家族とともに、一八三四年、十八年目にイギリスに帰えり、ポリネシア伝道の報告と将来の計画についての準備に奔走したのである。殊に彼の属したロンドン外国伝道協会に住民の求めと伝道者派遣の急務を懇えた結果、一八三五年には六名の宣教師がサモアに送られることになった。ヒース、ハーディー、ミルス、マクドナルド、ムーレー、バーデンがそれであり、バーデン以外は夫人を伴い赴任することになった。一行は同年秋イギリスを立って、翌一八三六年春ラロトンガに一端落着き、ここから、それぞれサモアの諸島に出かけたのである。

彼等から二年おくれて、ウィリアムスは、一八三八年の四月十九日、故国に最後の別れを告げ、カムデン号に乗ってポリネシアに帰任した。船はシドニーを経て、十一月二十四日サモアのツツイラに入港した。このとき彼は、サモアの狀態について、彼の不在中異教を捨てたものの数が甚だ多いこと、又、サモア全体に約六万乃至七万の人口があるが、そのうち約五万は現にキリスト教の教えを受けていると報告している¹⁰。彼は妻の健康や希望などを考慮して、

このサモアに落着きたいと計画していたが、翌一八三九年十一月、ニューヘブリディーズ諸島へ伝道の旅をし、はからずもエロマンガ島で十一月二十日、住民に棍棒で殺されたのである。²⁹

これより先き一八三六年に派遣された六名の宣教師の努力に加うるに、一八三八年のウィリアムスの再訪問及び翌一八三九年暮の彼の殉教の報に励まされて、サモアの布教は一段と進展を見た。すなわち一八三七年サバパリイに、一八三八年マノノとウポルに、一八三九年ツツイラにそれぞれ教会が組織された。一八四〇年までにはウポル、サヴァイイ、ツツイラの三大島にミッシェンのステーションのネット・ワークが張りめぐらされた。彼等は一年に二回ずつ慣例としてアピアに集まり、サモア全体の布教について協議した。また地方ごとに地区委員が設けられ、ロンドンの本部に連絡をした。この諸地区の中で、ツツイラの生長は特に著しく、一八三九年伝道開始以来パンゴパンゴの住民の間に堅実な発達をなし、最初の年にすでにキリスト教覚醒運動が起り、多くの住民が教会員に加わった。一八四〇年、一八四一年、一八四二年と、この運動は高潮をつづけたのである。

サモアの布教も他の未開地の布教と同じく、伝道とともに、文明技術の伝達又は教育の普及がこれと併行して行われた。プリーチングとプリンティングとライティングの三つは近代未開地伝道の通例であり、これに各種産業の指導及び医療事業等が各地で行われている。またプロテスタントの布教の特徴は最初から聖書を土着の言語に翻譯すること、ポリネシアでも各地でこれが行われたが、サモア語のそれは一八三五年に、ジョーシ・プラットとサムエル・ウィルソンによって始められている。ウィルソンは先ずマタイによる福音書を準備した。かくて早くも一八三七年にはファヒネでチャールス・バーフによってマタイ福音書が二〇〇部印刷されて、サモアに送られた。一八三八年十一月二十七日ウィリアムスは、前述の如く、カムデン号に乗ってシドニーから第三回にサモアに來航したが、それより数ヶ月以前すでに印刷機械がシドニーから送り届けられていた。このカムデン号で二人のサモア青年がシドニーから帰郷し、宣教師で印刷技術家であったステアの助手となり、有力な働きをした。住民達は印刷機の運転を見て、驚

きの目をみはるのであった。一八三九年中に「諸宗教物語」が五〇〇〇部と、これに続いて「サモアの炬火」が土着語で出版された。前者はキリスト教と諸宗教との間に惹起された諸困難について指導を与えたものであり、サモアのクリスチャン達に喜ばれた。一八四〇年には「イエスと弟子達の歴史」と題する小さな書籍が出版され、一八四五年の終りまでに新約聖書の主要なる部分が約七万九千部も出され、これとともに、讚美歌、教義問答、綴字練習書等が約七、七二一、〇〇〇頁も印刷され、島々に配布されたのである。聖書中サモアの印刷機で出された最初のものは、「ヨハネによる福音書」であり、これは一八四一年五、〇〇〇部出された。これにつづいて「マルコによる福音書」「ルカによる福音書」、「使徒行伝」、「ロマ人への手紙」、「コリント人への手紙」、「ガラテヤ人への手紙」等がそれぞれ一万部、「第二コリント人への手紙」「第一、第二テサロニケ人への手紙」及び「ヨハネ黙示録」合せて六〇〇〇部が出されたのである。一八四九年には、新約聖書が出され、一八五五年には旧約聖書の翻譯が完成し、印刷された。²⁵

教育事業も進み、特に一八三六年と一八三七年に到来した宣教師達は神学教育に力を入れ、一八四四年、マルア神学校 (Malua Institute) が誕生した。その場所はウポル島の西北南のマルアで、二十五エーカーの土地が先ず買われ、その後二十五エーカーが拡張された。その全土地代は二八ポンド三シリング一ペンス又は一エーカーにつき一シリングであった。ここに教室として二十二の建物がたてられ、それぞれ間口一六呎、奥行三二呎のものであった。この他宣教師住宅が二箇建てられた。生徒は学校の共同農園に労働を要求され、パンの木、椰子の木、ヤム、タロイも、バナナの木等を栽培した。彼等は卒業とともに後の生徒に譲り渡されるのであるが、他面、生徒の各自は共同販売額の余剰農作物を自分で売って学費に当てることのできたので殆んど自給生活ができた。又他の学校と違って、結婚は入学に少しもさしつかえにならなかった。全課程は四年制であったが、最初の年は十才から二十才にかけて二十五名のクラスで始められ、二年目には諸島中の各地から集った選り抜きの二十一名の青年でクラスがつくら

れ、いつも収容能力を超える有様であった。学課としては聖書の他、書き方、算数、地理、天文学、博物学、英語、図画等が教えられた。最初の二十五年間に七四八名の男子と三九五名の女子とが在籍したのである。彼等は卒業後はそれぞれ諸島の各地において伝道し、又、村々の有力者となって、文化の向上に貢献することができた。かくして、サモア伝道は年とともに、土着の伝道者をもって宣教師に替えることができるようになった。

神学教育その他、小学校教育も行われ、教会のある村々には必ずこれを設けた。またマルア、アアナ、ツアシヴィ、マタウツ等には高等程度の学校も設立され、英語に重きをおいた一般高等教育が授けられた。

一八八七年にはアピアに師範学校ができた。ここでも一般教育の他キリスト教教育が行われ、これらの学校には各地の将来の酋長やサモアの支配階級となるものが入学してその影響は大なるものであった。一八九二年にはパパウタにセントラル・ガールズ・スクールというのがつくられ、女子教育が行われ、これはサモアの家庭生活がキリスト教のレベルに高められるのに貢献した。⁽¹³⁾かくてサモア諸島には、一八五三年頃、ウポル島に二万人の信徒がおり、マノノ島では全人口二千人が全部クリスチャンになっていた。サヴァイイ島では一万二千乃至一万三千、ツツイラには六千及びその他の小さな島に数百の信者がいた。⁽¹⁴⁾

かくしてサモア諸島にキリスト教の足場は殆んど不動のものとなったが、キリスト教が直面したサモアの社会及文化における問題はいかなるものであろうか。

他のポリネシア諸島におけるがごとく、ここでも土地の種族間の戦闘が一番大きく問題となった。サモアの戦争の原因は、大抵酋長が殺されたのでその復讐が企てられるとか、または一地方の他地方に対する勢力争い等である。しかしここでもしばしば戦争を回避するための手段も講じられたのである。すなわち多くの場合、犯人を引渡すとか、重い賠償を支払うとか、徹底的な服従を表明するとかのごときである。降服の印としては、薪と、豚を焼くための石と、竹片とが携えられる。薪と石とは料理のためのもので、自分らは貴方の豚と同じであるから、豚の如く自由に料

理してほしいというのであり、また竹は昔からサモアでナイフの役をしたのである。しかし一端戦いが始まると容易に終わらないで、長い場合は数ケ年も続くことがあった。サモアには専門の戦士というものはなく、棍棒をもつことのできるほどの男子はことごとく、戦争にかり立てられたのである。女と子供と老人たちは鍛冶場の避難所とか他の地へ移されたが、酋長や主なものの妻達は戦場に伴われ、彼女らの夫が傷をするときに手当をする役をつとめた。また中には女傑ともいふべき女性がいて、夫とともに戦場において棍棒をもって戦うものもあった。彼等は陸海ともに戦術に長じており、海ではカヌーを使って、夜陰に乗じて敵地の背後に上陸し、未明に村を襲撃するという方法であるとか、陸では鍛冶を抜けて奇襲を試みるなどであった。戦いに敗れた側の村では、男は殆んどの場合殺され、女は戦勝者側に分配される。この諸島でも、男子は敵の首級を挙げること (taking of trophy heads)⁽¹⁵⁾ を誇りとし、酋長の前にできるだけ沢山の首を持ち帰るのがサモア人の光栄であった。或るときには敵の首を広場に積み上げてピラミッドをつくるなど、あたかも旧約時代エズレルの門の入口に首を積んだように、⁽¹⁶⁾ また一四〇一年チムールがバグダッドを陥れたとき九万の首級をもってピラミッドが築かれたといわれているのに似ている。サモアの場合、首塚の頂上には敵の酋長の首を載せて、戦の跡を語り祝するのであった。数時間後それらの首は親戚のものに渡されるとか、どこかに埋められるとかされた。胴体は葬られるか野良犬の喰うにまかされたのである。

このような部族と部族との間の戦闘は、キリスト教の普及に障害となった。一八四八年にも諸島内に戦争が起り、これは七年間続いたが、これは伝道に悪い影響を与えた。この戦闘はウポルとサヴァイイに拮⁽¹⁷⁾ したが、このとき古い異教の勢力が盛り返えし、またキリスト教信者であるものをも未開的行為に引戻すのであった。⁽¹⁸⁾ しかしこの戦闘の中であって、宣教師たちは絶えず中立を保ったので、戦闘中の住民の双方から危害を受けることはなかった。宣教師たちは戦場であって負傷者を看護し、逃亡者達を保護したのである。宣教師は住民に日曜日の礼拝を厳守するように勧めたので、その日は休戦するという有様であった。また教会のメンバーに戦争反対のものが続出したので、戦争が長

引くにたれ、酋長は戦士の数を失い、戦争不可能に陥るものもあった。そこで兵役拒否の信者は酋長から罰せられるものもあったが、さらに多くのものが戦争反対に加わったのである。⁽¹⁹⁾ターナーが記述するところによれば、サモアにおけるキリスト教の戦争反対への影響に関して最も根本的なことは、従来戦争において徹底的な復讐と残虐との風習のあったものたちが、互に愛すべきことを教えられたということであった。この血の復讐 (blood-revenge) の慣習は、その後も時として復活したが、キリスト教の指導によってなくなったものと報ぜられている。⁽²⁰⁾

次に教会とサモアの社会組織との関係を見たい。サモアの社会は他のポリネシアの社会と異り、政治の中央集権的な性格が少く、諸島全体に最高権力者はいたけれども、王制という様なものではなく、この最高権力は戦の場合のみ機能を發揮し、通常は分権的で、家長的な民主制で政治が行われた。三〇〇乃至五〇〇の人口をもつ村が政治の単位となっており、しばしば八つ乃至十の村が一つに結ばれて地区を形成し、共同防衛その他共同の作業に当たったのである。サモア全体にこの様な地区が約十ほど存在した。

村には一〇乃至二〇人のマタイ (matai) と呼ばれる家長がいて、各家族に対して責任をもっていた。このマタイは、酋長 (chief) と訳されているアライ (alii) と、代弁酋長 (talking chief) と訳されているトゥラファレ (tulafale) と、二種の称号のいずれかを与えられていた。酋長は形式的には代弁酋長の上位を占めたが、実質的には代弁酋長に力があつた。後者は酋長の代弁者又は代理者で、マタイによって成る村の会議 (fono) に有力な指導権をもっていた。サモアの社会では身分的な階層の差はなく、称号 (title) による地位の差が重んぜられることが特徴的である。そして、村の地位はその酋長の地位により決まり、又、家族集団の地位はマタイの有する称号によって決つたのである。ところで、その称号は、固定的な身分的な根拠によってではなく、主として二つの方面の考慮によって授けられる。一つは腕力、魅力、指揮能力、清廉潔白等の個人的な素質であり、もう一つは、大工とか、雄弁とか漁撈等の専門的能力である。家族集団は通常約五〇人位を含むものであったが、それぞれの家族集団は三十才以上の男の中から

マタイを選んだのであり、必ずしも世人に限らず、素質或いは力あるものの中から選ばれた。これを村の議会フォノで確定したのである。

且この土地は酋長や家長が所有し、彼等が土地を管理していたが、これを売却することや、その他家族にとっての重大な事項に関しては、酋長やマタイだけで決めないで、家族の全員に相談することになっていた。⁽²¹⁾

キリスト教が伝って後も、こうした家長的な社会制度は存続し、ほとんど顕著な変化を見ないばかりか、かえって教会側にこの制度が反映するという有様であった。すなわち、各地方はそれぞれ従来独立の気風に富んでいたところから、教会にも各地方ごとに自治的な精神が尊重されたのである。もちろん信徒は宣教師に対しては尊敬と服従の態度をもったのであるが、この家長的な自治精神を見逃しては、サモアの宗教の歴史はよく理解できないものと云われている。教会におけるこの傾向の表われとして、多くの村々において住民出身の牧師が任じられ、それら土着の牧師や伝道師が教会生活において、ちようど古い村の生活における家長と酋長の立場に代るものとなったのである。しかし、キリスト教は最初から、土地の酋長の地位に対しては、酋長がキリスト教に友好的である場合にはその力を用いることはあったが、彼らがただ酋長であるというだけの理由で教会内における何か特別の地位を与えるという様なことは拒んだのである。⁽²²⁾ また宣教師達はサモア全体が各地域或いは村ごとに統一がないことに問題を感じたのである。宣教師の立場からすると、凡ての地方や村々の人々が全部一致するような生活上の諸規程があることを望んだのであるが、それは不可能であった。宣教師達は普通十乃至十五の村を受持っているものであったが、その村々では必ずしも全部の家長や酋長が信者になっているわけではなかったから、皆のものが、宣教師達の勧める生活様式に従うことはほとんど不可能であった。また一つの村がこれに聴従しても、次の村はそうでなかったので、宣教師達は、理想的な政治形態として、サモア全体に統合した政府の実現を期待したのである。

一般社会の風習とキリスト教との関係について見るならば、この地では、食人の風習は古くはあったが、宣教師の

来島した頃にはあまり見られないようになっていた。ただ時として、食人酋長があったことが報ぜられている程度である。また東部ポリネシアやニューヘブリディーズにおけるが如き人身犠牲や嬰兒殺や棄児の風習は、サモアではほとんど認められなかった。しかし、墮胎の風習はかなり見られており、ときとしては母体の生命にもかかわることもあった。しかしこの風習もキリスト教の伝来以後大いに改善されたのである。⁽²⁴⁾

次に、結婚の風習との関係を見よう。サモアでは、他のポリネシア社会におけるごとく、族外婚の名残りがあり、⁽²⁵⁾又一夫多妻婚の現象は普通であった。⁽²⁶⁾すべての若い娘には純潔が期待されていたが、特に酋長の娘に対しては嚴重であり、奇異な風習としては、酋長の娘が結婚しようとするときは、代弁酋長が、公衆の面前でその娘の処女性を検証する (deforation ceremony) ⁽²⁷⁾ ことになっていた。もし処女でないことがわかれば最大の不名誉となるのであった。

しかし、その不名誉から免れるため、恋人と墮落ちをするものも多かった。この風習に対しては、宣教師達が強い反対をしたが依然として存続し、後に法律で禁ぜられたのである。⁽²⁸⁾

サモアでは男女の間は、幼少の頃は互いにタブーであったが、青春期に達すると、むしろ極めて、自由になり、未婚の青年男女の間では密会は普通であり、又、相手を得ることのできない男性は、夜分若い娘のいる家に忍び込む風習が行き亘っていた。しかし、若し発見されたら、これもまた不名誉なこととされ、どの娘からも相手にされなくなるのであった。又結婚前、女の家にしばしば通って後に結婚に入る場合も多かった。⁽²⁹⁾

この様な男女間の性的道德の風習及觀念に対して宣教師達はキリスト教のモラルを教え、極力貞潔を奨励したのである。ことに、真夜中のダンスは最後に性的無秩序に陥るのを常としたので教会はこれに反対した。⁽³⁰⁾ こうしてキリスト教のサモア社会の道德的な向上に対する機能は大いなるものであった。

サモアはこのようにしてもキリスト教を迎え、十九世紀の前半には全島にキリスト教が普及した。プロテスタント教だけでなく、一八四五年にはローマ・カトリック教が伝えられたが、このときすでにプロテスタントの地盤が

く、その布教は困難であった。それにもかかわらず漸次島民の間に進出し、一八五三年には二一四一人の信徒を得ている。⁽³¹⁾その後、ロンドン外国伝道協会に属する教会の会員が一番多く近年の統計では、その数は人口約五万の中約二一、〇〇〇であり、次にオーストラリア・メソジスト教団関係の信徒数約六、〇〇〇名、カトリック教徒約五、〇〇〇名となっている。⁽³²⁾

政治的にはその後一八七八年、アメリカ合衆国がパゴパゴを占有し、一九〇〇年にはイギリスは他に代償を得てサモアから退き、西サモアはドイツ領となり、ツツイラと東部諸島はアメリカ合衆国領となった。第一次大戦勃発とともに、一九一四年ドイツ領サモアはニュージールランドに占領され、戦後西部サモアはニュージールランドの委任統治下におかれ、東部サモアは引続きアメリカ領となっている。

このような政治的変遷を経て、今日に至っているのであるが、現在のサモアの文化はミードによれば、代表的な「混雑文化」であるとされている。従ってその特徴は「文明の極度の融通性」⁽³³⁾に認められている。しかしその融通性(flexibility)はもともと固有文化に具っていたものではなく、むしろ、ヨーロッパ文化渡来前の生活様式は厳しい社会的風習によって定められていたのである。これがヨーロッパ文化殊にキリスト教の影響によって、変改され、人々は古い権威主義的な規則から解放されたのである。しかし、ミードによれば、キリスト教はこれに代る嚴重な強制力をもっていないので、サモアのモラル観念は甚だ自由放任に近いものになったのであるとされている。⁽³⁴⁾すなわち、キリスト教が原始的なタブー制や文明諸国の法律と異り、権力による強制力を用いるものでないからである。ことに初代以来指導的なキリスト教の勢力であつたイギリス人によるキリスト教のタイプは自由主義的なものであつたから一層そうであつた。ここにわれわれは、文化接触変容における宗教の機能の大なる力とともに、その社会文化的な限界を示されるのである。宗教の役割の直接の場合と間接の場合とを考えねばならない。単に直接的な結果としての信徒の数によって、必ずしも社会・文化への全面的影響をはかることはできない。むしろ信徒の少ない場合にも社

会・文化的影響力の大きいことも実証されるのであるから、直接的なものとともに間接的な社会・文化的機能の大きさを社会・文化的全般に亘って考えるのでなければならぬ。

註

(1) Margaret Mead, *Coming of Age in Samoa* (A Mentor Book, 1949) p. 176

(2) メラネシアには多くの黒人系のものがあるが、サモアには存しない。しかしジョン・ウイリアムスの見解によれば、元来ポリネシアの全領域にもニグロ系の人種が散在したのであるが、後にマライ・ポリネシア系の優越民族に圧倒され、滅ばされた。殊に、サモアその他小さな島々では共存が困難なため絶滅されたが、比較的大きな島たとえば、パプア島及びその附近の島には残存することができたものと考えられている。(John Williams, *Narrative of Missionary Enterprise in the South Sea Islands*, N.Y., 1837, p.458)

(3) ジョン・ウイリアムスは、一七九六年六月二十七日ロンドン北方の郊外トットナムに生れた。彼の父はジェームスといい、祖先はバプテスト派の非国教徒で、そのためイギリス国教会から破門された強い信念の人であった。彼の母は陶器商の子であり、同じく信仰厚く、子供らを毎日彼女の部屋に集めて、聖書を教え、祈りを共にしたのである。一四才のとき、ロンドンの金物屋に徒弟奉公をつとめ、商人としての道を学ぶことができた。後年彼は太平洋伝道において「酋長であれ、庶民であれ、住民達の心を捉えるのに特殊の能力をもっていた」と評されたように、人を得る力をもっていたが、それは彼の母譲りの商人としての人をそらさぬ技術であり、また彼自身幼少の奉公時代に会得したものと云えよう。彼はまた余暇には自分で鉄工場に出かけて、実際に鉄の道具をつくる技術を見習った。これも後年太平洋の伝道において役立ったのであって、殊に彼の伝道船(“The Messenger of Peace”)を自分でつくることのできたのは、少年時代の労働の賜物であろう。一八一四年秋、ジョンはロンドンのタバナクル教会のメンバーとなり、日曜学校の教師として、また文書の配布係や病人慰問係として教会に奉仕した。しかるに、一八一五年の秋ウィルクス牧師が太平洋伝道を語り、タヒチ島のポマーレ王が改宗を決心したことを述べたのは彼に海外伝道への契機を

与え、ウィルクスの推薦で一八一六年七月ロンドン外国伝道協会に加わり、同年九月三日按手礼を受け、海外伝道への献身の誓いを固めたのである。その頃同じくタバナクル教会の会員であったメリ・チャーナー (Mary Channer) と相知り、共に海外伝道に熱意をいだいていたので、一八一六年一〇月二九日結婚し、同年十一月一七日彼等は相携えてハリエット号でシドニーへ出帆した。これ以来彼は一八三九年一月二〇日ニューハブリディーズ諸島中のエロマンガで住民に惨殺されるまで、二十三年間、妻とともに、南太平洋の島々に伝道したのである。享年四三。ポリネシアの使徒と呼ばれ、又、サモア人の父と称えられている。(Ellis, John Williams, N. Y., 1889)

- (4) ハサビヤの福音書一十九章二一—二〇節。
- (5) Williams, A Narrative of Missionary Enterprises in the South Sea Islands, N.Y., 1837, pp. 314—316.
- (6) Williamson, The Social and Political Systems of Central Polynesia, London, 1924, vol. II, pp. 218—251.
- (7) Ellis, John Williams, p. 106.
- (8) Newcomb, Cyclopeda of Missions, p. 704; Turner, Nineteen Years in Polynesia, London, 1861, pp. 104—105.
- (9) 拙著「宗教社会新研究」昭和二十八年、関書院、三〇三頁。
- (10) E. Prout, Memoirs of the Life of the Rev. John Williams, London, 1843, pp. 528.
- (11) Ibid, pp. 556—557.
- (12) Richard Lovett, The History of the London Missionary Society, London, 1899. Vol. I, p. 387, Turner, op. cit. ch. xvi
- (13) Lovett, op. cit., pp. 389—395.
- (14) Harvey Newcomb, op. cit., p. 704.
- (15) Margaret Mead, Male and Female, (Mentor Book) 1955, p. 298.
- (16) 「旧約聖書」列王上二〇章七、八節

- (17) 拙著「東洋文化史上の基督教」昭和十六年、理想社、八四頁。
- (18) Lovett, op. cit., Vol. I, p. 381.
- (19) Turner, op. cit., pp. 298—309.
- (20) James S. Dennis, *Christian Missions and Social Progress*, N.Y., 1899. Vol. II, p. 484, footnote 2.
- (21) Turner, op. cit., p. 284.
- (22) Lovett, op. cit., Vol. I, p. 396.
- (23) Williams, op. cit., p. 491; Williamson, op. cit., Vol. II, p. 240, Vol. III, p. 346.
- (24) Turner, op. cit., p. 175.
- (25) R. W. Williamson, op. cit., Vol. II, pp. 124—135.
- (26) Ibid., pp. 148—177.
- (27) Mead, *Coming of Age in Samoa* (*A mentor Book*) 1949. p. 176. ハンセン著、吉田「次訳」『ポリネシアに於ける法と秩序』三河製本、昭和二十七年、三三三頁。
- (28) Mead, *Coming of Age in Samoa*, p. 70.
- (29) Mead, *Coming of Age in Samoa*, pp. 68—69.
- (30) Ibid., p. 96.
- (31) Harvey, op. cit., p. 750.
- (32) 外務省調査局「太平洋諸島誌」昭和十八年、上巻、一一四頁。
- (33) Mead, *Coming of Age in Samoa*, p. 176.
- (34) Ibid., pp. 172—178.

The Early Stage of Acculturation in Samoa.

Résumé

The Samoan Island became famous through Margaret Mead's anthropological study as the Trobriand Islands gained notice through Malinowski's research in those islands.

Mead pointed out, in her "Coming of Age in Somoa," the unique character of the Samoan culture, namely "the extreme flexibility of the civilization as it is found to-day, resulting from "the blending of the various European ideas, beliefs, mechanical devices, with the old primitive culture," that is "a thorough and harmonious acculturation." "But," she says, "it is only fair to point out that Samoan culture, before white influence, was less flexible.

In this paper I have made a brief study about the early stage of the contact of the native culture with the Western culture, especially dealing with the hardships which confronted the members of the London Missionary Society and the missionaries' contributions to the progress of the Samoan's ways of thinking and living.